

その他

2020 東京オリンピック・パラリンピック エッセイ集
Essays about Tokyo 2020

藤田 紀昭¹⁾ 三井 利仁¹⁾ 児玉 友¹⁾ 山本 和恵¹⁾
坂口 結子²⁾ 安藤 佳代子¹⁾ 鳴海 りお³⁾ 須崎 剛⁴⁾

Motoaki FUJITA, Toshihito MITSUI, Yu KODAMA, Kazue YAMAMOTO,
Yuko SAKAGUCHI, Kayoko ANDO, Rio NARUMI, Go SUSAKI

- 1) 日本福祉大学 スポーツ科学部
Faculty of Sport Sciences, Nihon Fukushi University
- 2) 日本福祉大学 スポーツ科学センター
Nihon Fukushi University Center for Sports Sciences
- 3) 日本福祉大学 スポーツ科学部
Undergraduate student, Nihon Fukushi University
- 4) 日本福祉大学大学院 スポーツ科学研究科
Graduate student, Nihon Fukushi University

1. パラリンピック聖火ランナーを務めて (藤田紀昭)

2021年8月24日(火)に東京の代々木公園でパラリンピックの聖火ランナーを務めてきました。スポーツ振興審議会メンバーであることから東京都の推薦を受けたものと考えています。全国各地で採火され、さまざまな人の様々な思いが込められた火をつなぐことができ、とても光栄で嬉しく感じました。また、聖火リレーを終えた後ブルーインパルスのパフォーマンスもあり、とても思い出深いものになりました。

本来ならば、代々木公園サッカー場から織田フィールド陸上競技場内までのコースを走るはずでした。実はこの織田フィールドは1964年の東京パラリンピックの開会式が行われた場所なのです。その東京パラリンピックゆかりの地に57年ぶりに聖火を持ち込む姿を(当時パラリンピックでは聖火はなかった

ようですが:笑)何度もイメージし、一人盛り上がり、ワクワクしていたのですが、新型コロナ感染の拡大により、かなわぬ夢となりました。結局、代々木公園の中の設定された場所でトーチキスにより次のランナーにつなぐという形になりました。

2週間前から健康チェック表をつけ、リレー前日にPCR検査を受けるなど感染対策を万全にし、当日の朝9時15分に駒沢公園体育館に集合しました。当日まで誰と一緒に走るのか、誰から火をもらい誰に渡すのか知らされていませんでした。私は、タレントのテリー伊藤さんと一緒に走り、井上順さんに火をつなぐことをここで知りました。その後「自分の頭を聖火で燃やさないためにトーチこんなふうにかけてください」などと説明を受けました。そして、リレーをした後のポーズを話し合っておくと言われていたので、皆さんと相談し、井上順さんのギャグポーズをとった後、陸上のウサイン・ボルト

のポーズをとることに決め、何度かみんなで練習もしましたよ。

11時頃に駒沢公園をバスで出発。11時30分代々木公園に到着。ここで再度リレーの段取りやトーチの持ち方などの説明を受け、いよいよ本番です。自分の番が来るまでの間、一緒に走るテリー伊藤さんとお話していました。とてもまじめな方で、障害者スポーツがなぜ普及しないのかなどと質問をされ、お答えしたりしていました。そして、いよいよ自分たちがトーチを持って走る時がきました。先ごろお孫さんができたばかりという女性から、私とテリー伊藤さんのトーチに火が灯され、ポーズ、そして満面の笑顔で手を振りながらゆっくりゆっくりと決められたたった30mほどのコースを走り、井上順さんに聖火をリレー、みんなで相談したポーズもしっかり決め、役割を終えました。聖火リレーを見られるのはランナーの関係者4人までと制限されていました。私の場合、本学の東京サテライトの榊原裕文さんが来てくださり、盛り上げてくださり、関係者がいることでとても心強く感じました。ありがとうございました。妻も来てくれました念のため、榊原さんはこのあと、陸上競技でボランティアを行う本学学生を受け入れるために東京青年会館に向かわれました。聖火リレーの後、記念撮影などを行い、来た時と同じバスで駒沢体育館へ帰りました。その後、取材などを受け、解放されたのは16時くらいでした。

聖火リレーは毎日いくつかの場所で、いくつかのセッションに時間区分され、実施されていました。駒沢公園からの行きかえりのバスの中の皆さんの会

話から、私たちのセッションはトーチリレーのスポンサーであり、運営管理をしていた(株)リクシルの関係者(リクシルの社長さんも同じセッションで走りました)、トーチの燃料を提供しているエネオスの関係者の方が多かったように感じました。そして、私たちのセッションの後が、元スマップの方たちのセッションでした。

パラリンピックも無観客で実施されることになり、実際のパラリンピックにはなかなか触れることもできなかったのですが、短い時間でしたが、多くのボランティアの方の活躍や気持ちのいい対応にじかに触れることができよかったです。そして、とてもいい思い出となりました。



2. 2020 東京オリンピック・パラリンピック競技大会に組織委員会メンバーとして参加して（三井利仁）

【招致から準備期間】

2013 年 9 月 8 日早朝に 2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催が決定した。（写真－1）当時はジャパンパラ陸上競技大会を山口県で開催しており、役員でその決定を見守っていた。決定の瞬間はその場で喜びを感じ、選手、競技役員、連盟役員で安堵に浸っていた。



写真－1 山口県山口市ジャパンパラ陸上競技大会にて（2013.9.8）

これまでにパラリンピックをはじめ、世界選手権、アジア大会等、多くの国際大会に役員として参加してきたが、自国開催のパラリンピックにどのような形で参加するのか、この時点では未定であった。私は、2014 年から（一社）日本パラ陸上競技連盟（NF）の理事長を拝命し、その任務に就いている。2020 年が近づくにつれて、NF としてパラリンピック開催のために組織委員会に要員を送る必要があった。当然のごとく、日本としても金メダルを取る準備、さらなる選手発掘、育成、強化と国内の事業を充実していく必要があった。特に陸上競技という、パラリンピック全出場選手 4000 名のうち 1100 名が陸上競技であり全参加者の 1 / 4 が陸上競技であり、メダル獲得に注目もされていく。日本

チームの強化、大会運営と NF として人員配置を検討する必要があった。そこで自ら、2018 年に 2020 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会（TOCOG）のメンバーとなり、パラリンピック開催の準備の任に就いた。配属はスポーツ局競技運営本部競技運営課陸上競技チームとなった。勤務先は東京・勝どきにあるトリトンスクエア（写真－2）内の TOCOG であった。当時はスポーツマネージャー、担当課長、主事と私の 4 名で準備にあたっていた。その後、体制も強化され多くのスタッフが揃いオリンピック・パラリンピックの担当に分かれ開催に向けて精力的に働き続けてきた。



写真－2 トリトンスクエア

【大会延期】

2019 年世界にコロナウィルス感染症が広がり、2020 年の開催延期が決まった。その時も東京のホテルに滞在をしながら準備をしていたが、余りの出来事に呆然としたことを今でも克明に記憶している。大学内ではスポーツ科学部 1 期生の就活支援、卒論指導と多忙を極めていた。この年で 2020 東京パラリンピックは無事に終えて、大学教員に専念する計画で動いていたのでこの延期は、私にとっても大きな出来事であった。2021 年には大学院もスタートし、多くの時間を TOCOG に費やせなくなることが明確であった。延期、コロナ対策、運営形態の見直しとこれまで経験したことのない短時間での作業が求められた。毎日 300 を超えるメールに目を通して、具体的な方法など、情報の共有が日々、続いた。

Tokyo 2020 competition management

Athletics Sport Manager: SUZUKI Kazuhiro (JPN)
Para Athletics Sport Manager: OSHIMA Satomi (JPN)
Athletics Services Manager: UEDA Haruyo (JPN)
Athletics Technical Operations Manager: MITSUI Toshihito (JPN)



SUZUKI Kazuhiro
Athletics Sport Manager, Tokyo 2020
kazuhiro.suzuki@tokyo2020.jp
SUZUKI Kazuhiro is a graduate of Tsukuba University's school of health and physical education. His first involvement with large sporting events was as an official at the 1995 Universiade and 1998 Asian Athletics Championships, both held in Fukuoka, Japan. Suzuki later became an assistant competition manager at a number of major Athletics events held in Japan, including the 1999 IAAF World Indoor Championships in Maebashi, 2006 IAAF World Cross Country Championships in Fukuoka and 2007 IAAF World Championships in Osaka. In addition to his role as Tokyo 2020 sport manager for Athletics, Suzuki is a member of the Japan Association of Athletics Federation (JAAF) board of directors and is chairperson of the JAAF competition management committee.

図1 Tokyo 2020 - Team Leaders Guide Athletics
より抜粋

【東京2020パラリンピック競技大会の運営】

今回、私の任務は Athletics Technical Operations Manager というものであった。(図1) いわゆる、大会運営に関わる計画調整が主なものであった。この大会を運営する組織委員会では、アスリートや観客、大会関係者が安全かつ安心して参加できる大会運営と、アスリートが最高のパフォーマンスを発揮できるような高水準の環境を実現させるため、ファンクショナルエリア(FA)と呼ばれる個々の機能に分かれて、担当分野ごとに運営準備を行っていた。私はスポーツ(SPT)に所属していた。このFAは競技に関わるすべてを担当した、選手の輸送、機材の輸送、式典、医務、競技などすべてと連携していた。どこかの部署で問題が起きるとSPTに確認となり、スムーズに運営できるよう調整を行った。

パラリンピックが開催されると予想以上の激務だった。毎日寝る時間がなく、気がつくとオリンピックスタジアムで朝を迎えている日も少なくなかった。体重は4kgも減っていた。コロナ禍でなければもっと多くの感動もあったと思うが出来るすべてを出し尽くしたと感じた。世界中が見守る世紀のスポーツイベントの中核で経験できたことは今後の人生においても貴重な経験であったと思う。

今回、多くの審判、ボランティアがコロナ禍で参加することが出来なくなった中、日本福祉大学の学生ボランティア33名が全員、感染することなく大会運営を支えてくれたことに心から感謝したい。(写真-3)



写真-3 開会式前日に！

3. パラリンピック「バドミントン」の解説を担当して(児玉友)

2021年9月1日から9月5日、国立代々木競技場で行われた、2020東京パラリンピック「バドミントン」競技の解説を担当しました。この競技は、車いすと立位の2つのカテゴリーがあり、障害の程度や運動機能に応じて6つのクラス(車いす2クラス、立位4クラス)に分かれています。使用するラケットやシャトル、ネットの高さは一般のバドミントンと同じですが、障害の程度によりコートの広さが限定されています。

オリンピックでは、男女別のシングルスとダブルス、男女でペアを組む混合ダブルスが行われました。パラリンピックでは、シングルスは、男女別、クラス別で行われました。ダブルスは、各クラスで持ち点が異なり、ペアの持ち点の合計が車いすクラスは3点以内、立位クラスは8点以内と定められています。立位クラスのダブルスは、上肢障害、下肢障害のペア、下肢障害同士のペアなど、障害の程度やクラスが様々です(表1)。

東京パラリンピック競技大会から正式種目となったバドミントンの日本代表選手は13名(男子5名、

表1 ダブルスの上限ポイント

カテゴリー	クラス	種目	上限 ポイント	例
車いす	WH1	男子	3	WH1+WH2 (=3)
	WH2	女子		WH1+WH1 (=2)
立位	下肢	SL3	8	SL3+SU5 (=8)
		SL4		SL4+SL4 (=8)
	上肢	SU5		SL3+SL4 (=7)

※ 2020 東京大会で行われたダブルスのみ記載

女子8名)でした。試合は、予選から始まり9月4日から5日にかけて準決勝、決勝、3位決定戦が行われました。試合の様子は、NHKのBS4K・BS8K, BS1, Eテレ及び総合で放映されました。私は、立位クラスの解説を担当しました。

放送席には、モニターが設置され、各コートの試合や結果などを随時確認することができました。放送では、担当のアナウンサーが、試合の様子や展開を説明し、解説者が障害の特性や戦術などを説明しました。

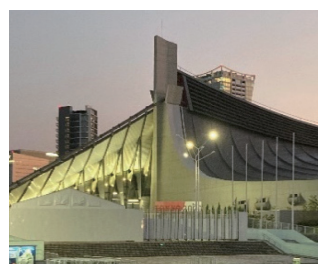
本大会の解説で苦労したことは、初めてパラリンピックのバドミントンを見る人に対しての伝え方です。選手の中には、片側前腕切断や義足など、外見で分かる選手もいれば、軽度の麻痺や腕が上がりにくいなどの運動機能障害の選手など、外見から障害があることが分かりにくい選手がいます。解説では、障害の特性に加え、前後左右に振られた際にバランスを崩しやすいことや、コート内を動ける範囲、スピードが障害の程度によって異なることなどを伝えるようにしました。また、大会前に、パラリンピックに向けて取り組んできたことや、ここに注目してほしいといったポイントを選手から聞き、解説に加えるようにしました。

担当のアナウンサーは、常に分かりやすく状況を説明し、タイミングをみて「この選手の特徴はどういったところでしょうか」「今のプレーはどうか」「このプレーはどうか」などと質問を投げかけてくれました。プレー中の「よく拾った!」「あと一歩でした」といった抑揚のある話し方はとても参考になりました。

録画・放送がない時間帯は、スタンドから選手を応援することができました。日本代表選手の中に

は、一緒に練習を重ねてきた選手や10年以上前から知っている選手が出場しており、パラリンピックという最高峰の舞台での活躍に胸が熱くなりました。

本大会では、バドミントンは9個のメダルを獲得しました。無観客だったことは本当に残念でしたが、最終日はボランティアの方々が応援に駆けつけてくれました。選手がメダルを獲得した際には、盛大な拍手が送られ、会場全体が祝福ムードに包まれました。解説を通してパラリンピックに関われたことに感謝し、この体験を多くの人に伝えていきたいと思います。



4. 東京2020パラリンピック競技大会選手村での調理サポート（山本和恵）

【コロナ禍での人材確保】

東京2020パラリンピック競技大会期間において、約2週間選手村で調理サポートに携わりました。今回参加したきっかけは、公認スポーツ栄養士仲間

からの情報でした。その情報は3月に、飲食提供スタッフエントリー開始、交通費（片道2000円／日）、宿泊費の支給は無いとありました。この条件では、関東圏にお住まいの参加者が多いだろうとの事でした。しかし、東京はコロナ禍でも一番大変な場所のこともあり人材確保に苦戦しているとの事でした。しばらくするともう一通メールが届いて、選手村での人材確保が思ったより出来ていないとの連絡でした。さらに、SNSでも人材募集の連絡が入っていました。本当に困っていると感じ、家族会議の結果、家事は娘や夫に任せて飲食提供スタッフにエントリーしました。さらに、愛知県内の栄養士養成校の先生にも伝え、何人か学生もエントリーされました。募集要項には、Web面接、適性検査が有り、これらをクリアしてからの採用になるため、何年ぶりが緊張感が高まりました。採用後は、慣れないいくつかの登録、提出期間が短いいくつかの準備物、コロナの予防接種2回、宿泊予約、検便など3月から準備のため慌ただしい日々でした。

【目的を持って望む】

選手村に入村した時に、目的をもって望むことにしました。①元日本代表ブラインド柔道選手の食事指導を2021年4月から行っていました。今後もトップ選手の栄養指導に活かすことを考え、疑問に感じた事は聞き取る。②2026アジア競技大会が愛知県で開催されます。その時の愛知県栄養士会（現在理事として務めている）としてどのような準備が必要か体験し、見て学ぶこと。③本学強化指定部・支援部の食環境を現在整えています。調理場での人の動き、料理メニュー、運営方法等を見て学ぶこと。④現在の自分の知識や調理技術がどこまで選手村で通用するか試す。以上の4点を入村の目的としました。④の自分試しは、きっかけとなった出来事があります。それは、選手村で研修時にミニトマトを半分に切るチャンスが有りました。自分は、毎日料理を作っている手前、率先して行いました。しかし、使用してみると思ったように切る事が出来ませんでした。その包丁は、自宅の使い辛くて年に数回しか使用しない包丁と全く同じ形のものでし

た。帰宅後、選手村に入村するまで、選手村で使用した同じ形の包丁を「刃の特徴」から勉強し直して、「力の入れ具合」「ひき方」「手首の使い方」など、学生時の教科書を開いて勉強し直し、毎日使い辛い包丁を使用しました。苦戦の結果、準備が整い、いざ選手村へ。

【選手村の食事】

選手村のダイニングは、世界トップ選手のために調理して食事提供をします。その食事は、国を背負った選手の体調を整え、食中毒でも出たものなら勝敗にも影響がでるほど責任重大です。そこに携わる調理人は、健康でなくてはならないし、味覚障害があってはなりません。そのため、ホテル生活になっても食事には気を付けていました。



写真1 ホテルの朝食

賄いで出された食事から自分に足りないと感じた栄養素は、その日の仕事終わりに選手村の最寄り駅（勝どき駅）から終電に乗り、宿泊ホテル近辺のコンビニではほぼ毎日「ビタミンC」「抗酸化物質」「たんぱく質の多いヨーグルト」を基準に選んでいました。コンビニで栄養素を見ながら食品選びをしていると、コンビニの店員さんから話しかけられ、0時過ぎにコンビニへ来て、ほぼ毎日食品の栄養表記ばかり見ている女性って何者？って思っているんだろうなと思いながら店員と買い物を楽しんでいました。

選手村では、いくつかの部署があり、火を扱う調理場で料理を作っていました。夏場ということもあり普段より汗をかき、大きな鍋の「熱の伝導と火加減」を脳と肌で計算しつつ、食材の火の通りを均等にするために、大きな木べらを扱い身体の使い方や

力の入れ方を試行錯誤しながら料理を作っていました。一方、切る事に関しては、準備をしたかいがあり、スムーズに切る事が出来ました。料理は、温かい物を温かい状態で提供していました。その手順は、喫食数の連絡スタッフと連携され



写真2 深夜の勝どき駅

ており、作る時間を調整していました。さらに、1回の夕食に3回転の提供をしていました。また、食中毒を防ぐ方法は、基本である75度で1分以上加熱する事も徹底されていました。1つの料理を作るだけでも大勢の人が動くため小道具・人の流れ・工夫などがなされており、準備したスタッフに感銘しました。

【自分試しの結末】

選手村での仕事は、大変勉強になりました。自分試しは、国を背負うほど真剣な勝負に挑んでいる選手に食事を提供するときに、調理にこだわりを持ち、火加減、食材の火の通りなど五感で感じながら挑むことが出来ました。一方、何百人分の肉を切っ指に水ぶくれができ、暑い火の場所から汗をかけた状態で冷蔵庫へ作業を行い、足の指の感覚が無くなっていました。調理人もアスリートと同じ体力勝負であると痛感しました。食事は、食べてもらってなんぼの世界です。スポーツ栄養に携わる者としては、各々の競技の目的を持って献立を立て、提供する相手を重んじ、五感で感じ、いつでも誰にでも満足してもらえる料理を作っていきたいと再認識しました。

最後に、毎日作っている料理は、夫婦げんかをすれば味が濃くなるし、気持ちが入っていなければ味が薄いと実感していました。そんな毎日の食事を振

り返る事も出来ました。さらに、今回、目的を持って選手村で学んだことを今後の現場で活かしていきます。

5. 東京オリンピック競泳日本代表サポート (坂口結子)

2021年7月15日～2021年8月2日に東京オリンピックに出場する競泳日本代表のサポートを行いました。競泳は1996年のアトランタオリンピックでメダル0を経験して以来、『日本代表のチーム化』という方針のもと改革が行われ、金メダルを含む多くのメダルを獲得する競技へと成長していました。しかしながら、新型コロナウイルスの影響もあり、2020年・2021年は海外・国内での代表としての合宿、海外遠征が行えず、チームとしてまとまった活動が行えていない状況でした。この状況と地元開催であるメリットを生かし、東京オリンピックに向けては、ナショナルトレーニングセンター、GMOアスリートパーク湯の丸屋内プール（長野・東御市）を中心として個別強化を行っていました。

7月16日にオリンピックに出場する競泳日本代表選手およびコーチがナショナルトレーニングセンターに集合するため、私は7月15日に東京入りしました。その日は他のスタッフとの打ち合わせ、配布資料の作成、整理を行いました。期間中は毎日PCR検査を行い、OCHAというアプリに体温や健康状態を毎日入力しました。



7月16日に選手およびコーチが集合し、最後の直前合宿が行われました。7月21日以降は、選手の競技日程に合わせて、随時、選手村に送り出してきました。私は大会組織委員会から借用した車の運転手として、必要な物品の輸送にも携わりました。



大会が始まってからは、ナショナルトレーニングセンターの競泳テクニカルルームのテレビで大会を観戦しながら、個人の大会結果の打ち込みなど現場でなくてもできる仕事を手伝いました。初日の大橋選手の金メダル獲得、大会中盤の本多灯選手の銀メダルにとっても湧いたのを覚えています。大会中盤になると、今度は自分の競技が終了した選手が選手村から戻ってきましたが、多くの選手が思うような結果を残せないまま帰ってきていました。多くの期待

と自分自身の大きな目標をもって挑んだ大会でしたので、とても疲れた表情をしていました。しかしながら、多くの選手が「また、次、頑張る」と口にしていました。

大会最終日は大会終了後、バスにてナショナルトレーニングセンターに選手たちは帰ってきました。科学スタッフも一緒に帰ってきたため、PCやモニターなど多くの荷物を運びました。その後、事務的な残り仕事を終わらせ今回のサポートは終了しました。

出発前は長い3週間だと思っていたのですが、開会式が始まってからはあっという間に終わったように感じます。競泳の結果は金2、銀1の計3個のメダル獲得に終わりました。目標としていたメダル獲得数には届かず、競泳日本チームとしては反省や課題の多く残る大会となりました。今後はこれまで行ってきた「チームで戦う」という流れに戻し、個別強化ではなく、チーム強化に重点を置く方針に転換していきます。

今回、東京オリンピックに携わる機会を下さった（公財）日本水泳連盟、ご理解いただいた大学に感謝しております。今後は、今回の経験を活かし、研究また教育に励んでいきたいです。最後になりましたが、本大会、姉弟で水泳界のサポートをさせて貰いましたので、同じ顔の写真を記念に載せておきたいと思います。





6. 東京パラリンピック競技大会・陸上競技ボランティアの学生派遣（安藤佳代子）

2021年8月24日（火）～9月5日（日）までの13日間、日本福祉大学としてパラリンピック競技大会陸上競技の学生ボランティア派遣が行われました。当初2020年大会開催として、事前に本学スポーツ科学部三井教授が学生指導や審判指導等を行っていましたが、大会の1年延期によりこれまでボランティア参加のための準備を行っていた学生の内、卒業や就職活動、教育実習などで参加を断念した学生が出てしまい残念でした。しかし、新たにボランティアに行けるチャンスとなり参加ができた学生もいました。今回の学生派遣のために、事前に学生指導や大学との調整等を担当された三井教授は非常に大変だったかと思います。今回私は、派遣学生の引率兼大会ボランティアとして参加しましたので、その点について報告したいと思います。

派遣に関しては、本学のスポーツ文化振興課と東京サテライトが連携しホテルやバスの手配など様々な準備を行って下さいました。最終的な派遣学生は合計33名となりましたが、直前まで人数に変動があり、出発前日まで確認メールが飛び交っていました。やはり一番心配となった点は、新型コロナウイルスの感染についてでした。学生が参加するにあたり、十分な対策を取ることは当然ですが、大学とし

て学生を派遣するという点で、私としては派遣期間中「絶対に感染者を1人も出してはならない」という緊張がずっと続いていました。振り返ってみるとその緊張が長期間続いていたことは、私にとってかなりの心理的な負担となっていました。最終的に全ての学生が感染することなく帰ってこれたことは非常に良かったですし、その安堵感は言葉では言い表せない感覚でした。対策としては、参加者には出発の2週間前から体温と体調チェック、行動制限を必須とし、現地に到着してからは毎日ホテルのロビーで検温と体調チェック、PCR検査を2日～3日の間隔で行い、毎日チェックする日々を過ごしました。感染者がなく派遣が終われたことは、参加学生の意識や理解、協力があったからだと思います。

学生派遣を行ったのは陸上競技で国立競技場での活動でした。三井教授が組織委員会メンバーとして陸上競技に関係していたこともあり、学内で事前に具体的な指導を行っていただけたことで、学生もイメージや準備ができて初日を迎えることができました。学生の役割は様々に分かれていて、投擲競技審判員、跳躍競技審判員、テクニカルインフォメーションセンター、Warm-up会場・練習会場係、出発係、競技係、輸送係などを担当しました。各係には日本陸上競技連盟や組織委員会の所属の方々っていて、仕事の内容について説明や指示を受けて学生ボランティアと一緒に活動する形でした。陸上競技は、モーニングセッションとイブニングセッションに分かれており、ほとんどの学生がその両方を担当していました。宿泊先が日本青年館ホテルで国立競技場から徒歩5分と素晴らしい立地だったことが非常に良かった点であり、セッション間にホテルで数時間休憩することができたことで疲れも取れやすく夕方からまた活動することができました。会場での学生の活躍は素晴らしく、多くの部署の方々から学生に対してお褒めの言葉を掛けていただけました。

13日間という長い活動でしたが、学生は本当に頑張ってくれました。ボランティアで長時間の活動が続くなど、体も疲れていて大変な活動も多くあったかと思いますが、毎日手を抜かずに、やるべきこ

とをきちんとできる学生の姿を誇りに思いました。また、今回の活動が終わってから学生が話してくれた内容には、パラリンピックのボランティアに参加して本当に良かった、この体験を今後に活かしたい、パラスポーツにさらに興味を持ったのもっと勉強したいなど、様々な嬉しい感想を聞くことができました。最後に、このような大学派遣という形で、学生へ活動の機会を与えてくださいました本学の関係者の皆様、また現地での様々なご支援・ご指導をいただいた皆様へ、学生と共に心から感謝致します。



写真1 競技者係（レーン番号シールの準備など）



写真2 出発係（レーン番号設置のスタンバイ）



写真3 輸送係①（ストレージから投擲台を運搬）



写真4 輸送係②（投擲台を競技場内へ運搬）

7. パラリンピックボランティア体験記 （スポーツ科学部4年 鳴海りお）

8月25日～9月5日の12日間、パラリンピックボッチャ競技のボランティアとして東京の有明体操競技場に行ってきました。ボランティアといっても、審判にかかわるタイマー（計時）が主な仕事内容だったため、事前に1年の研修を経て参加してきました。

事前研修では、勉強会でボッチャのルールを理解してから、選手の練習会や大会などで実際にタイマーとして参加し経験を積みました。私はこのボランティアが決まるまではボッチャのことをほとんど知らなかったのですが、事前研修でボッチャの面白さを知り、このパラリンピックをととても楽しみにし

ていました。

参加当日を迎え、緊張しながらも会場へ入りました。初日から3日間は大会準備期間でした。初日に審判員の顔合わせとユニフォームの配布がありました。審判員を含む技術役員にはジャージとフォーマルウェアが配布されるため、フィッティング会場へ行きスーツのサイズ合わせを行うなど目まぐるしい1日でした。2日目からはタイマーの練習が始まりました。タイムシステムを提供しているOMEGAの方から機器の説明を聞き、ひたすら触って練習をしていました。機器の説明やミーティングなどはすべて英語で行われ、久しぶりに聞く英語に戸惑ったのを覚えています。3日目は全体リハーサルが行われ、選手入場や表彰式のリハーサルに選手役として参加しました。私はメダルを贈呈する偉人の役でした。本物の表彰台に上っているボランティア仲間をみて羨ましく思いました。

8月27日からはついにボッチャ競技の予選が始

まりました。選手がコートに入ると練習とは違い、会場には只ならぬ緊張感がありました。タイマーの仕事は失敗できないというプレッシャーで、私もかなり緊張していました。実際に試合が始まると、仕事に集中しながらも世界レベルのプレーに見入ってしまいました。特に驚いたのが足投げの選手のプレーです。ボッチャは基本手で投球しますが足でも投球が可能です。私は予選で足投げの選手を初めて見て、さらにその選手は勝ち進んでいきました。足先から繰り出す正確なコントロールとパワーのあるプレーに、ボッチャならではの「人間の可能性」を感じさせられました。ボッチャは1試合1～1時間半程なのですが、予選期間中は1日4試合のタイマーをしました。1試合にかなり集中力を使うので、予選中はとにかくコーヒを飲んで集中力を切らさないようにしていました。これは余談ですが、審判員の待機ラウンジにはスポンサーであるコカ・コーラ飲料やmeiji食品、果物がいつでも食べ放題



でした。そのため大会期間中はストレスなく、むしろラウンジでの時間を楽しく過ごすことができました。

予選が終わると、個人・チームそれぞれで1日決勝トーナメントが行われました。メダルがかかっている試合のため選手たちの控室での雰囲気や審判たちの念入りに事前確認をする姿を見て、私は緊張するとともに決勝を間近で見られることを楽しみにしていました。決勝の試合はどれも接戦ばかりでした。投球の制限時間をギリギリまで使う選手も多く、選手の大切な1秒にずれが生じないように必死にタイムシステムの画面に張り付いていました。決勝で一番印象に残っているのは、マレーシアの選手とイギリスの選手の試合でした。最後まで勝敗がわからない試合で、接戦の末イギリスの選手が金メダルを獲得しました。イギリスの選手はアシスタントの方と泣きながら喜び、マレーシアの選手も悔しがりながらも最後はお互いを称えあっていました。会場は拍手に包まれ、それを見て主審が涙ぐんでいました。私も感動して泣きそうになりました。審判員としては本来良くないのかもしれませんが、それほど感動的な試合でした。

この12日間のパラリンピックではタイマーの仕事をしながらかはありましたが、たくさんの試合を見て、選手の喜ぶ姿や信じられないほどすごいプレーに心を動かされました。パラリンピックという大舞台にボランティアとして参加できたことをうれしく思っており、また感動の試合にタイマーとして携われたことを誇りに思っています。ボッチャはどんな人でも参加できるスポーツであり、それぞれの戦い方で強くなっていける「無限の可能性」のあるスポーツです。私はこれからパラリンピックでの経験をもとに、ボッチャをより多くの人に好きになってもらえるように広げていきたいです。また、ボッチャが教えてくれた可能性というのを自分にも当てはめて、大学卒業後も何事もあきらめずに自分なりの打開策を見つけられるように進んでいきたいです。

8. 2020 東京パラリンピック参加報告 (スポーツ科学研究科1年 須崎 剛)

【はじめに】

2013年9月7日アルゼンチンのブエノスアイレスで開かれたIOC総会にて2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催が決定した。東京での開催は1964年以来で、パラリンピックに関しては同一都市での複数回開催は夏の大会では初となる記念すべき大会であった。

そこで陸上競技部とスポーツ科学部は東京パラリンピックに学生コラボレーター(補助競技役員・補助運営役員)として参加するため私達は2017年から活動を始めた。陸上競技部が主体となり、陸上の公認審判資格を取得し、高校生の大会から、国内のパラ大会^(注1)まで幅広く競技補助員として参加し経験を積んだ。その後2018年に学内で募集した学部生も加わったが、2020年3月末に新型コロナウイルスの感染が世界に拡大する中、東京オリンピック・パラリンピックの1年の延期が決定した。それにより新型コロナウイルス蔓延のため断念した学生や卒業生を除いた結果33名が参加できることになった。三井先生の指導の下、以前の競技大会で担当した部署を元に担当を割り振り、事前研修を経て大会に臨んだ。

【スケジュール】

派遣期間中のスケジュールの詳細を表1に示した。24日は美浜キャンパスと東海キャンパスに分かれて集合し、バスにて宿泊先の日本青年館ホテルへ向かった。競技の始まる8/27まではボランティアユニフォームの受け取りやチェックイン方法の確認や競技場等の位置関係の把握、サブトラックで練習器具の貸し出しや競技場内の安全管理、新国立競技場の会場設営を担った。さらに、本学学生が選手役となり機材やカメラ等を稼働し、本番同様大会を進行するドレスリハーサルを実施した。

8/27から9/4まで開催された陸上競技はモーニングセッション(以下MS)とイブニングセッション(以下ES)に分け実施された。MSは8時に新国立競技場内の本部に国内技術役員(National

表1 大会派遣中のスケジュール

時刻	日付	8/24(火)	8/25(水)	8/26(木)	8/27(金)～9/4(土)	9/5(日)
7:00			ホテル発	ホテル発	ホテル発	AM3:00～AM9:00 マラソン補助業務
8:00		8:00 美浜集合・出発	サブトラックにて 投擲台固定業務	新国立競技場にて投擲審判 の方のお手伝い	モーニングセッション 新国立競技場にて投擲補助員	ホテルチェックアウト ～ 移動
9:00	9:00 東海集合・出発式					
10:00	東海IC～渋谷出口					
11:00						
12:00						
13:00		昼食				
14:00	日本青年館ホテル着	サブトラックにて 投擲台固定業務	昼食	昼食	丸の内IC～東海IC	
15:00	国立競技場にて、ユニ フォーム受け取り		昼休憩	昼休憩 投擲台固定練習		
16:00	解散		ドレスリハーサル 新国立競技場にて選手役			イブニングセッション 新国立競技場にて投擲補助員
17:00						
18:00						
19:00						
20:00						
21:00			解散	解散	17:00東海着 帰着式 17:30美浜着 解散	
22:00						
23:00			解散			

Technical Official：NTO）と補助員（本学学生）が集合し、その後競技ピットに移動し競技を進行。13時ごろまで競技の補助を務め本部で解散した。ESは18時半に本部に集合しMS同様競技の進行、終了は22時前後であった。

最終日の9/5は全員3時から9時までマラソン業務にあたり、12時に東京駅丸の内線有明駅駐車場をバスで愛知へ向かい、17時に東海キャンパスにて帰着式、17時半に美浜キャンパスに到着解散した。

【業務内容】

私の業務内容は投擲の座位種目の補助員であった。座位投擲種目とは車椅子選手（F51～F57^(注2)）や脳性麻痺（F31～F34^(注3)）の方が対象である。本来、投擲種目の補助員は投擲物の回収、運搬と受け渡しがメインの業務になるが、座位投擲は選手の投擲台の固定業務も増える。

選手は個人の投擲台に座り競技を行うため、投擲台と投擲固定台とを固定しなければならない。その際にラチェット式のラッシングベルトを使用する（写真1）。私たちはこれまで、愛知パラ陸上競技フェスティバル^(注4)で2年間（2019年・2021年）固定業務を勤め、さらに夏休みも費やし、固定の練



写真1 ラチェット式ラッシングベルトとその固定練習

習をしてきた。しかし、投擲台は大きさや固定できる部位が選手によって様々で、その上選手の要望も内容が繊細で、さらに言葉の壁もあり、柔軟に対応することは至難の業であった。そのため、初日は2時間の競技時間に対し、約5時間もかかってしまった。選手に負担がかかるのはもちろん、競技自体が遅延してしまい、他の競技や表彰式なども遅れてしまった。

投擲補助員は私を含め4名であったが、座位投擲が同時に3箇所で行われることもあり、学生数が足りず、急遽他の部署から本学学生を8名招集し対応した。私たちには、選手が最も高いパフォーマンスを発揮しやすい投擲台の固定を保証す

る任務と責任があるため、12名の補助員でMSとESの間のわずかな時間に、投擲台を固定する練習を必死に重ね、この局面に対応できるようトレーニングをした。メンバーで話し合い連携を取り、練習を重ねていく内に徐々に競技時間を短縮でき、9/3のESでは1時間30分で終了できた。最終日には選手をはじめNTO、国際技術役員（International Technical Official：ITO）、および組織委員会の方々から、スムーズな進行ができたことに対してお褒めの言葉を頂き、達成感を感じた。



写真2 国立競技場で競技終了後NTOの審判方と

また、座位投擲では「両脚が膝裏から臀部後方（坐骨結節）まで座面に接触するように座らなければならない。膝上切断の競技者は、大腿部すべてが臀部後方（坐骨結節）まで座面に接触していなければならない。」というルールがある。体がうまく固定できていない選手は坐骨が浮いてしまったり、膝が動いたりすることがある。そこを主審は見逃さず赤旗を上げファールにする。それに対し多くの選手がその場で抗議をする。スタンドに居るコーチからも野次が飛んでくるのも聞こえてきた。ほとんどの選手が少なくとも2投はファールをもらっており、中には6投全部ファールを取られた選手もいた。おそらく自国ではそのプレーで通用しているのだろう。審判としては当たり前のことであるが、毅然とした態度で公正にジャッジする姿に、日本の審判団のレベルの高さに改めて驚かされた。

【2020 東京パラリンピック概要と日本人選手の活躍】

東京2020大会は、①万全の準備と運営によって、安全・安心で、すべてのアスリートが最高のパフォーマンスを発揮し、自己ベストを記録できる大会を実現（全員が自己ベスト）すること、②人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治、障がいの有無など、あらゆる面での違いを肯定し、自然に受け入れ、互いに認め合うことで共生社会をはぐくむ契機となるような大会とする（多様性と調和）こと、③成熟国家となった日本が、今度は世界にポジティブな変革を促し、それらをレガシーとして未来へ継承していく（未来への継承）こと、の3つを基本コンセプトとし、史上最もイノベティブで世界にポジティブな改革をもたらす大会を目指した。

参加国は、2021年6月16日の時点で168カ国と、史上最多になるとの見通しであったが、新型コロナウイルスの影響や政府方針により、6カ国が大会への参加を断念した。これにより、過去最多だった2012年ロンドンパラリンピックの出場国数である164カ国を下回り、162の国と地域並びに難民選手団となり、参加人数は約4400人であった。このうち、ブータン、モルディブ、パラグアイ、グレナダ、セントビンセント・グレナディーン、の5カ国が初参加となった。前回2016年リオデジャネイロパラリンピックで参加を認められなかったロシアは、「RPC（Russian Paralympic Committee）」として参加、国家としての出場ではないものの2大会ぶりの復帰となった。

日本陸上のメダル数はリオ大会の銀メダル4個、銅メダル3個から大きく増え、金メダル3個、銀メダル3個銅メダル6個を獲得した。金メダルを獲得したのは2008年北京大会以降3大会ぶりであり、リオ大会では銀メダルに終わった佐藤友希選手（T52/400m/1500m）や道下美里選手（T12/マラソン）は金メダルを獲得、また20代前半の選手が多く輩出されてきていることから、日本の競技力向上が顕著に現れた。しかしながら日本記録の更新やエリアレコードを記録したにもかかわらずメダル獲

得に届かなかった種目もあり、海外選手のレベルの高さが際立っている種目もあった。今後の日本人選手の活躍に期待したい。

【さいごに】

2週間とは思えないほど内容の濃い充実した時間を過ごすことができた。選手との素敵な出会いや、世界新記録の樹立に携われたこと、ボランティア同士の絆が生まれたことなど、自分の人生において本当に貴重な経験ができた。

大会期間中、改めて「障害者とは何か」を考えた。世間一般に「目が見えない」、「足が不自由である」、「注意が持続しない」など、その人の身体的、知的、精神的特徴が「障害」だと思われる。こうした意味での障害は、その人個人の「できなさ」「能力の欠如」を指し示すものである。「私たちより劣った人である」「かわいそうだ、気の毒だ」と、これまで障害者に対する理解が日本では変わってこなかった。

2011年に公布・施行された改正障害者基本法では、障害者はこう定義されている。「障害者、身体障害、知的障害、精神障害（発達障害を含む。）その他の心身の機能の障害（以下「障害」と総称する。）がある者であって障害及び社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にあるもの」つまり、社会の側にある壁によって日常生活や社会生活上の不自由さを強いられるものが、障害者の定義に盛り込まれるようになった。足がないことが障害なのではなく、足がないから何かができなくなる「スポーツをしたくてもそのような環境が無い」ことや「足が不自由なために望んだ職を得られない」ことが障害ということである。

定義が変わったが、障害者に対する認識が変わったわけではない。さまざまな人々が、すべて分け隔てなく暮らしていくことのできる共生社会の実現には「障害者に対する社会の偏見や差別」や、「障害者に対する社会の理解不足」といった健常者の心のバリアを壊すことによって生まれると考える。だからこそ、2020年東京オリンピック・パラリン

ピック競技大会開催のレガシーとして、障害者理解の促進や心のバリアを取り除くきっかけになって欲しいと考えている。私自身も今回の経験を生かし、東京2020のレガシーを引き継ぐものとしてパラスポーツの発展に寄与していきたい。

注

注1 第28回日本パラ陸上競技選手権大会 2017年6月10日（土）・11日（日） 駒沢オリンピック公園総合運動場陸上競技場（東京都世田谷区）

第24回関東パラ陸上競技選手権大会 2019年7月6日（土）・7日（日） 町田市立陸上競技場（東京都町田市）

2019 ジャパンパラ陸上競技大会 2019年7月20日（土）・21日（日） 岐阜メモリアルセンター長良川競技場（岐阜県岐阜市）

注2・注3

投てき競技のクラスを意味する「F」がある。50番台は脚長差、切断、関節可動域制限、筋力低下等の障がいのある車椅子や投てき台を使用する競技者であり、30番台は痙性麻痺、筋強直、協調運動障がいなどの特徴を示す脳原性の麻痺のある立位競技者及び車椅子や投てき台を使用する競技者。一の位は障がいのほど度に応じて0~9の番号が割り当てられる。基本的に番号が小さいほど障がいのほど度は重くなる。

注4 愛知パラ陸上競技フェスティバル 2021年6月20日（日） いちい信金スポーツセンター（愛知県一宮市）